



共存への道

国際言語文化センター教授 中村 耕二

2002年1月1日、私はルネッサンス発祥の地フィレンツェにてヨーロッパの通貨統合の歴史的瞬間を目のあたりにした。この日、EU（ヨーロッパ連合）12カ国は古代ローマ以来の新たな共通通貨ユーロをもって、経済通貨統合を実現させた。主権国家を超える超国家的な共同体を信託し、人口3億500万人、GDPの合計6兆ドルを有するユーロ圏の誕生である。ヨーロッパ大陸の歴史は戦争の歴史であり、2000年にわたりラテン民族、ゲルマン民族、スラブ民族が政治的抗争を繰り返し、常にイスラム文化の影響も受けてきた。この度のEU通貨統一を機に、ユーロ市民は不戦の願いを「主権の共有」という形で具現化させ、欧州を多文化・多民族共存という人類の実験場に変えた。EU市民は国家主義の危険を察知し、国家の枠を超える理想と叡智を世界に示したのである。

ユーロの語源は遠くギリシャ神話にまでさかのぼり、ゼウスの神が恋をし、白い牝牛となって連れ去られたフェニキアの王女エウローペー（Europa）に由来している。このユーロ硬貨の表は欧州の地図の上に1ユーロ、2ユーロと刻まれ、硬貨の裏はEU12カ国の独自のモチーフが刻まれ、各国の文化や人物を表象している。イタリア発行のユーロ硬貨の裏にはレオナルド・ダ・ビンチが刻まれ、フランスのユーロ硬貨にはLIBERTE（自由）、EGALITE（平等）、FRATERNITE（友愛）の文字が輝く。EU統一通貨である145億4500万枚のユーロ紙幣と、500億枚のユーロ硬貨はEUの歴史と未来を象徴している。

2003年の8月にも再びフランス、ドイツ、オーストリア、英国、スコットランド、などを訪れ、EU市民にインタビューをした。EU諸国では、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語などが、EU市民の間で飛び交い、国際英語を意思伝達の懸け橋としている。まるで未来の言語世界を見るようである。EU諸国内では国境を越えた大学間の単位互換と留学を推進する「ソクラテス・エラスムス交換プログラム」も功を奏している。EUでは2000年までに、75万人の学生が1800の大学へ留学しており、若い世代間では、より開かれた言語文化に対する意識変化が生じている。

すでにEUは2004年度から、ポーランドをはじめとする、中東欧諸国等の加盟を予定している。まさに、25カ国から成る多言語・多文化共存のための、新たな人類の実験場として、ヨーロッパ連邦への道歩んでいる。このEUの政策を立案するヨーロッパ委員会は、すでにEU市民の言語学習や文化知識の習得プロセスを支援するために、ELPと言われるヨーロッパ言語ポートフォリオ（European Language Portfolio）を実施している。ELPは個人の多言語学習や異文化知識習得のプロセ

スと自己評価、到達レベル等を継続的に記録し、企業や教育機関のみならず、様々な分野で使用されている。

EU諸国における最優先事項は、地域社会や組織で共存するための多文化間調整能力と外国語運用能力の育成である。すなわち、自文化に対する理解と誇り。多元的な視点を持ち、他者の立場に立って考えることができる能力や資質。多様性を受け入れ、異文化間の摩擦や葛藤に対する寛容性。そして意思疎通を図るための外国語運用能力である。

極東の日本に住む我々は、EU市民の自国の言語文化に対する誇りや他国の言語文化に対する開かれた態度に学ばねばならない。母国語及び自文化を大切にしながら、同時に多言語・多文化を学ぶことは人生観や世界観を変えうる。多文化社会に生きる人々は、同質社会に生きる人々よりも言語化して、意思疎通を図る能力が一層要求される。また、他者と相反する意見の衝突や比較を通して、自己の思考力を鍛える機会も多い。多様な人々との相互関係で誤解と理解を繰り返し、そのプロセスで高められた思考力や判断力は、より開かれた社会をもたらし、時として国家政策や国連の政策をも変えうる。

遠く離れたアジアの日本においては、今後世界から孤立しないで、世界の人々と共生するためにも、まず自国の歴史や言語文化に関する書を読み、さらに多言語、多文化を積極的に学ぶことが望まれる。まず第一に、古代中国から発生した漢字と日本固有の仮名文字を有し、世界言語の中でも特に相手との関係を配慮する日本語の豊かさを学び、自国の言語文化を修得することが必要である。心に残る良き日本語は詩と散文を愛する市井の人々の態度から生まれてきたはずである。「世に日本語の読める人間が存在する限り、『奥の細道』は残るであろう」と語ったドナルド・キーン氏の言葉を空疎なものにしてはならない。

第二に、多文化・多言語を学ぶことで、自分の属している文化を確認し、文化を相対的に見る意識を覚醒すべきである。自文化中心主義 (Ethnocentrism) や「文明の衝突」の虚構に陥ることなく、「和魂洋才」を原点とする進取の精神と複合文化の豊かさを尊重する日本文化をグローバルな財産として再認識し、その心を世界に発信することが大切である。

以上の認識から、混迷する今の時代こそ、自文化と多文化を尊重し、人類の平和と共存を論じる知識人の書が価値を持つ。以下に学生諸君に薦める書を列挙したい。

* 『知識人とは何か』 エドワード・サイード 平凡社 (1998) 大橋洋一訳

国家への忠誠の圧力、そこからどうしたら相対的に自立できるかを模索し、異議申し立てという知識人の責務を主張し、イラク戦争時にはアラブ・パレスチナ人として、また、米国民として、一貫してイラク攻撃を批判してきた今は亡きサイードの心の声

* 『オリエンタリズム』 エドワード・サイード 平凡社 (1993) 今沢紀子訳

西洋による東洋の支配、再構築、表象の問題点を浮き彫りにした異文化理解の原点

* 『メディア・コントロール』 ノーム・チョムスキー 集英社新書 (2003) 鈴木主税訳

米国の知識人として、核の恐怖、メディアの虚構とその脅威を語り、ベトナム戦争以来、米国の対外政策を批判し、イラク戦争の不当性を訴えてきた著名な言語学者の警鐘

* 『菊と刀』 ルース・ベネディクト 社会思想社 (1972) 長谷川松治訳

米国のオリエンタリズムに影響されながらも、一貫して文化相対主義の立場で文化によって条件付けられた日本人の行動様式の真髄を描き、米軍の占領政策に影響を与えた文化人類学者による日本文化研究の古典

* 『豊かさの条件』 暉峻淑子 岩波新書 (2003)

競争原理と国家権力を厳しく批判し、より良き社会を構築するための市民の責務と地球市民としての意識を覚醒させる名著

* 『広島ノート』 : 大江健三郎 岩波新書 (1965)

平和の証人である広島の尊厳をノーベル賞作家が語り、現代世界に対決する告発の書